様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　２２年　５月　７日現在

研究種目：基盤研究Ｃ
研究期間：2007～2010
課題番号：19530697
研究課題名（和文）　芸道の教育の全体論的考察

研究課題名（英文）　Holistic Approach in Education of Geidoh

研究代表者
安部　崇慶（ABE TAKAYOSHI）
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号：10136020

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：芸道 、全体論、稽古論、口伝

１．研究計画の概要

本研究の目的は、わが国の芸道の教育の全体論的把握に基づく分析や考察である。例えば、カンやコツといった感覚的な教育内容を具体的な形で被教育者に提示できうるまでに精選しえたのは何故か、それが経験至上主義の陥る隘路から免れえたのは何故か、その理論－実践の関係は如何ということになると個別具体と全体総体の把握が必要とされることになる。そうした研究はきわめて少ないのが現状である。

芸道の教育の全体像（それを構成する口承の教育あるいは口伝による伝達行為を含めて）の実態を探るに残された道は、家元クラスの教授場面の観察かあるいは実際に口承・口伝による芸能の教育（伝達・継承）を行なっている場面の観察を通しての検証を待たねばならない。その結果、導きだされる理論化への道筋をわが国の伝統的な教育思想の特質として捉え、教育における西欧パラダイムからの転換を図るための契機とすることである。

本研究の課題である「芸道の教育の全体論的考察」という視点には、以下のような含意が存在する。①芸道の教育でいわれる「型」とは、伝統の集積された客観である。②「型」を形成せしめる核心は、文字や書物を媒介としないノンバーバルな教育の方法・形態こそがベストであるという認識に裏打ちされている。③こうした芸道の教育は、個別ではなく総体として全体的に把握しなければ、理解不可能である。以上の本研究の目的（芸道の全体像の実態を探る）を果たすためには、家元クラスの教授場面の観察か、あるいは実際に口承・口伝による芸能の場面の検証に待つしかない、という点に留意しながら研究を進めている。

２．研究の進捗状況

＜平成 19 年度＞

平成 19 年度の研究進捗は、次に示すように、おおむね順調に実施できた。

○芸能の成立及びその背景に関する検討：各芸能に関する文献調査、資料収集を行ったが、ほぼ予定通り実施できた。

○芸能の稽古の実際の把握：各芸能の稽古の実際をビデオ収録したり、聞き取り調査を行う予定であったが、調査実施のサンプル数が相手方との日程調整不都合などの理由により、予定より少なかった。

○各地を代表する芸能の調査：この点についても、ほぼ予定通りに、執行できた。特に、口承の教育に関する秘伝の実際を祭礼行事に探ることもできた。

○「型」の形成に関わる諸外国との比較検討：この点については、時期、予算などの関係で今年度は検討を断念した。

＜平成２０年度＞

平成 20 年度の研究進捗も、次に示すように、おおむね順調に実施できた。

○芸能の成立及びその背景に関する検討：各芸能に関する文献調査、資料収集を、ほぼ予定通り行った。

○芸能の稽古の実際の把握：芸能の稽古の実際については、相手方との日程調整の不都合等の理由により、聞き取り調査の実施が困難であった。しかし、日本の伝統的な芸道である、日本舞踊については、限られた条件で

はあったものの、ある流派についての資料収集を実施することができた。
　○各地を代表する芸能の調査：この点についても、ほぼ予定通りに、執行できた。特に、口承の教育に関しては、鹿児島、広島等の祭礼行事に探ることもできた。
　○「型」の形成に関わる諸外国との比較検討：研究計画に示した外国における「型」の形成に関する資料収集としては、Stanford University（スタンフォード大学、米国カリフォルニア州）の East Asian Collection にて、訪問許可を得て、限られた条件ではあったものの、実施することができた。

＜平成２１年度＞
　平成２１年度の研究進捗も、次に示すように、おおむね順調に実施できた。
　○芸能の成立及びその背景に関する検討：各芸能に関する文献調査、資料収集を、ほぼ予定通り行った。
　○芸能の稽古の実際の把握：芸能の稽古の実際については、予定した全ての聞き取り調査は実施できなかった。（相手方との日程調整の不都合等の理由による。）
　○各地を代表する芸能の調査：この点については、ほぼ予定通りに、実施できた。特に、口承の教育に関しては、那智勝浦や加東市上鴨川等の祭礼行事に探ることができた。
　○「型」の形成に関わる諸外国との比較検討：研究計画に示した外国における「型」の形成に関する資料収集としては、アメリカ合衆国・カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA：University of California, Los Angeles）ワールド・アーツ・アンド・カルチャー学部（World Arts and Cultures）において、限られた条件ではあったものの、研究資料の収集を実施することができた。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
（理由）
　資料収集については、ほぼ予定どおりに達成できた。文献解釈や文献研究については、これまでの実績に積み重ねている。また、祭りなどの現地調査も進んでいる。しかし、聞き取り調査は、相手方と交渉したが、受け入れ相手方の都合により、実施できないところもあった。

４．今後の研究の推進方策
　前述したように、具体的な方法で、総合的な考察を実施する予定である。そして、これから最終分析で、全体論的考察と教育学的分析について、総括する予定である。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計１件）
①安部崇慶、「日本的コミュニケーションの特質と様相」、（兵庫教育大学教育コミュニケーションコース編（予定）、「教育コミュニケーション論」）、北大路書房　2010 年７月出版予定